

幼稚園の現状調査に基づく早期防災教育教材の制作

都市計画—都市環境と災害

正会員 ○ 伊村 則子*¹正会員 石川 孝重*²防災教育 地震 絵本
幼稚園 教員 幼児**§ 1 はじめに**

地震国である日本は、個人の防災力を高めることが求められており、阪神・淡路大震災後、学習指導要領に防災教育が位置づけられ、学校での防災教育が本格化した。では、学齢前の防災教育はどのようになっているのだろうか。本報では地方自治体の学齢前の防災教育の位置づけを調べるとともに、幼稚園での防災教育の実態を調査し、現場ニーズに基づいた教材の開発を目的とする。

§ 2 都道府県の防災に関する姿勢

行政の防災教育の姿勢を探るため、都道府県別に学校における防災に関する取り組みを調べた。

2.1 防災教育の位置づけ まず防災課が作成する地域防災計画を調査すると、地震防災に関する予防計画「防災思想・知識の普及」等の項目で、防災教育が言及されている。しかし、内容のほとんどが学校教育にとどまり、幼児期に言及しているものは47件中11件であった。さらに、その11件の内容も幼稚園等に対する指導の詳細はなく、早期防災教育の関心の低さが明らかとなった。

次に、教育委員会による防災の指針を調べると、学校防災の方針を明確にしている自治体は9都道府県(北海道、神奈川、東京、静岡、愛知、和歌山、兵庫、愛媛、福岡)・11指針(公開は9指針)で、「防災教育」「防災管理」「防災に関する組織活動」であった。内容は防災管理が中心であり、幼児期の防災教育の詳細を示すものは9件中3件で、全国的には幼児向け防災教育は進んでいないことがわかった。

幼児期の防災教育の詳細が示されている指針3件^{1)~3)}の内容によると、静岡県と和歌山県の指針では、発達段階に応じた生涯の教育活動を通じ、防災対応能力を向上させるために、従来の避難訓練中心の防災教育ではなく、各教科や特別活動等の教育全体での取り組みを強調している。愛媛県の指針では、安全に生きる資質の育成や安全な環境整備を目的に、「安全教育(安全学習と学習指導)」「安全管理」「組織活動」を示し、防災に関しては、安

全学習の一つとして「災害安全」を位置づけ、幼稚園では体験的理解や保護者との連携が効果的であるとしている。

2.2 発達段階に応じた防災教育 教育委員会が作成する指針^{1) 2)}より、幼児期～青年期の発達段階に応じた防災教育の流れを分析し、内閣府が推進する小学校～高等学校の防災教育事例⁴⁾と比較した上で、幼稚園の防災教育内容を位置づけた。

学校では、各教科・行事・訓練等から災害のメカニズム等を理解し、適切な行動を身につけることが求められており、さらに自分の身の安全のほか、地域の安全についても学習する。一方、幼稚園では児童期の前段階として、災害に関心をもつこと、自らの安全のために大人の指示に従うことが求められている。また、幼稚園は活動時間の多くが遊びであるため、身近な事象から健康で安全な行動や命の尊さを体験的に学ぶことが重要になる。

§ 3 実態調査にみる幼稚園防災教育の現状と要望

幼稚園における防災教育の現状と防災教育に対する要望を把握するため、2005年8月～10月、東京都文京区と豊島区の私立幼稚園、計6園の園長にヒアリング調査を実施した。その概要と結果を表1に示す。

3.1 防災教育の姿勢と現状 防災教育は集団での避難を目的とした訓練が中心で、平均避難訓練は7.3回/年であった。地震・火事・不審者を想定して行われ、迅速に落ち着いた行動を目標にしていた。また、煙ハウスの体験や防災館の見学を訓練に加えるなど、体験的な教育を重視していた。さらに、非常時の対応マニュアルの作成や、教員の防災研修、保護者への説明会を行うなど、非常時の危機意識の高さが明らかとなった。このように、現場では行事や体験的な活動を重視するほか、幼稚園側の防災管理に対する意識が高いことがわかった。

3.2 防災教材に対する要望 調査では、教育者側の教材への要望を把握するため、既存の防災絵本^{5) 6)}を各幼稚園の園長にみてもらった。その結果、「興味を引く

表1 ヒアリング調査の結果

概要	文京区				豊島区	
	幼稚園 園児数	A	B	C	D	E
訓練の内容	地震・引渡し・防犯等	地震・引渡し等	地震・引渡し・併設施設との総合訓練等	地震・引渡し等	地震・引渡し(2回)等	地震・火事・引渡し(2回)等
訓練回数	年7回	年4、5回	年8回	年3回以上	年9回	年11回
防災意識・防災教育の特徴	消防署や警察署に要請した煙ハウス体験・起震車体験等	明確な目標(異常を察知し先生の指示で行動する)	ニュースや日常の出来事からの安全教育・被災地への献金・防災紙芝居の使用	煙ハウス体験等の体験学習と防災館の見学(年長児)	警戒宣言発令時の応急対応マニュアルの作成	地震・火事の具体的な対処法の指導
防災絵本(5)6)に対する意見	興味を持ちやすい。正誤をはっきり示すことは違和感がある。	言葉の韻を大切にしている。	直接的な内容で分かりやすい。年少の導入に適する。	カタカナ、漢字は省いた方がよい。	津波・火事等体験できない事を絵で表現するのはよい。	幼稚園で使うには望ましくない。
防災教材に対する考え	幼稚園での防災教育の可能性あり	絵本ならば物語形式の方が効果的	絵本より、事実にもとづいた真実な話をする方が効果的	子供が興味を持ちやすいので利用価値あり	間接的教育より体験的教育が重要	使い方が第だが、知識は直接体験的学習が効果的
防災に関する問題点	ふざけず訓練すること、建物の防犯性の低いこと	保護者が幼稚園を過信する点(保護者への啓発)	保護者の理解力減少による補助説明の必要性	ふざけずに訓練に参加させること	非常時を想定すべき段階的訓練の廃止等	恐怖感と防災、防犯教育の兼ね合い
求める教材	特になし	模範的訓練等の教員用教材	保護者へ啓発できるもの	特になし	特になし	特になし

よさはあるが、教材は間接的な学習となり、体験学習が中心である幼稚園では難しい面もある」との意見を得た。また、幼児教育者の立場からは、絵本教材の場合、幼児の心に響くような物語絵本から防災を学ばせたいと考えていることがわかった。

次に、子ども側の要望も同様に理解するべく、園児を対象に防災絵本⁵⁾の読み聞かせを行った。園児からは、防災訓練や、理解している絵に対して発言があり、過去の体験学習を思い出して絵本の内容を理解している様子がわかった。

以上の結果より、間接的な学習となる教材は、幼児の心に響く要素を含む物語で、訓練などの体験学習の内容を知識として整理し学習できる内容のものが求められている。また、幼稚園では毎日、絵本の読み聞かせを行うため、平時からの導入のしやすさを考慮して、絵本をツールとした教材を制作することにした。

§4 防災絵本の位置づけとストーリー作り

教材は、日常の地震の経験や訓練での体験学習から、地震の理解がみられる年長を対象とする。また、ヒアリング調査から考察された「真剣に学ぶもの」「心情を大切にしたい物語から学ぶもの」とするため、作成する絵本は災害時の行動について心情から学びとる物語絵本とする。

まず、子どもの心に残るものとするべく、絵本の下調べを行った。幼児の名作絵本等を参考に絵本の特徴や工夫点を分析し、構成や内容を検討すると、感情の起伏や内容の反復・対比が欠かせないことがわかった。また、

ハラハラする展開の後に安堵感を加える構成が多くみられ、絵本の構成上、重要な展開であることがわかった。

次に、実態調査と2.2項で示す幼稚園で指導すべき防災教育内容を考慮し、防災項目を検討した結果、災害に関心をもたせることを目的に、基本事項である「地震の存在と危険性」「地震時の身の守り方」を主眼とする構成にした。さらに、実態調査では幼児の防災意識が高い傾向にあったことから、身の守り方の応用的な内容として「地震への備え」を加え、備えの重要性を表現する。また、「過大な恐怖感を与えてはならない」「絵本ではわかりやすい絵と文が非常に重要である」という園長の意見を参考に、地震の場面を外側から観察する女の子を主人公に、図1のような①～④の4場面構成の物語を考えた。

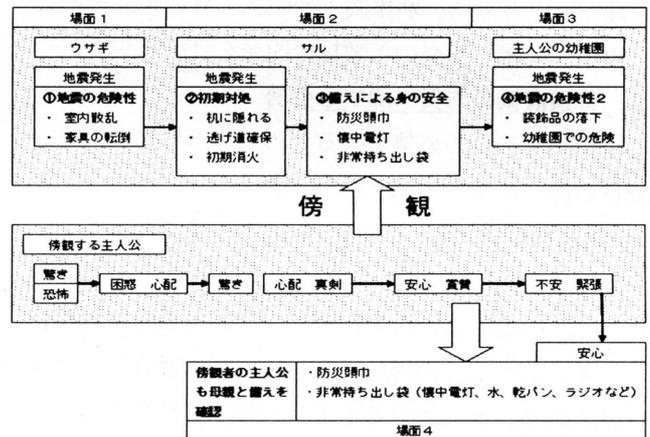


図1 絵本の構成

物語は、ウサギとサルの家に起きた地震を、観察する女の子を通して、地震の危険性と備えの大切さを認識する内容とした。母親と防災の備えを確認する場面により、地震の恐怖感だけでなく安心感も含め、感情の起伏で子どもの心に響くよう工夫する。そして地震発生時の良い対応例と悪い対応例を対比させたり、地震の様子を反復させたりして地震時の対応を印象付けることにした。また、主人公が穴を覗いて地震の様子を観察するという行為を盛り込み、子どもをひきつける要素を加える。ヒアリングでは一目で内容を理解できる絵が重要であると指摘されたため、図2のようにページの左側には主人公が穴を覗く様子を示し、その右側には穴の中で起きている場面を表現して工夫することとした。

上記のような、さまざまな工夫を盛り込むことにより、名作絵本の調査や幼稚園の実態調査から抽出された防災教材に対するニーズに対応させた。

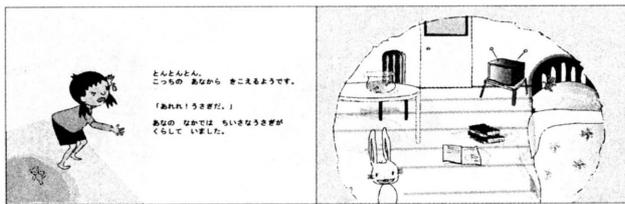


図2 見開きでの穴の様子表現

§5 防災絵本の試作と評価

まず、幼児に携わる専門家の意見として幼稚園の先生に絵本の絵コンテを見てもらった。その結果、子どもが扱う防災グッズとして特に防災頭巾を強調することと、地震の恐怖感との兼ね合いで安心感を与える表現を加える修正をした。また、場面4(図1)の幼稚園のシーンは「複雑な印象を与え、子どもがストーリーを理解しづらくなっている」と指摘されたため、削除した。

次に、防災の専門家にも一通り絵コンテが完成した段階で意見をもらった。その結果、第一に「幼児には地震の準備に関する表現が難しい」という意見を得、表2に示すように、子どもがすべき行動と大人がすべき行動を分類した。そして、子どもがすべき行動は強調して示し、大人がすべき行動の表現には新たに母ザルを登場させて、大人が対処する展開へと改善した。また、先の園長に対するヒアリング調査において「保護者に対しても、子どもとあわせて防災や安全に関する啓発が必要である」と指摘されていることもあわせて、図3のように絵本の読み手となる大人にも防災の役割を与えて、保護者の防災意識が高まるように工夫し、修正した。それに伴い、地震発生直後の初期対処として机の下に入って身を守ることを表した場面でも、図4のように新たに登場した母ザルを加えて表現し、全体にまとまりをもたせた。

表2 防災項目の分類

	項目	子供がすべき行動	大人がすべき行動
初期対処	机の下にもぐり身を守る	●	●
	扉を開け、逃げ道の確保		●
	火を消し、初期消火		●
備え	防災頭巾の使用	●	●
	懐中電灯の備え		●
	非常持ち出し袋の扱い		●
	家具止め		●

第二に、「室内散乱の場面で、周りの家具や皿、本が倒れているのに、当人には物理的な損傷がなく、無傷な点に違和感がある」との意見に対しては、図5のようにウサギには、子どもが恐怖心を持ちすぎないようケガす

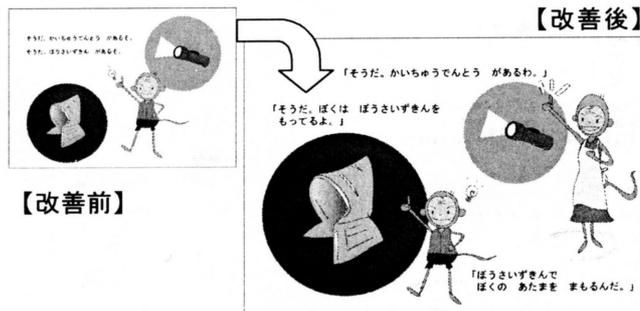


図3 母ザルの挿入(1)

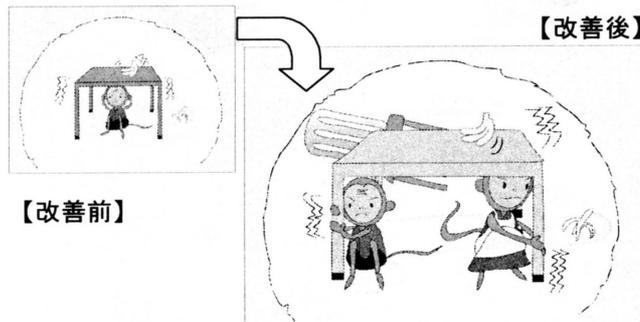


図4 母ザルの挿入(2)

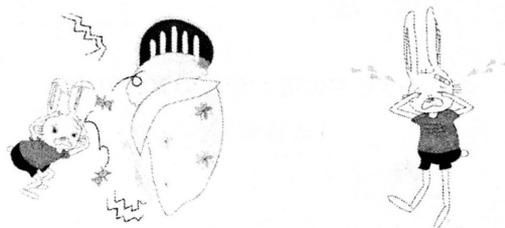


図5 追加したケガの表現

る表現を控えめに加筆することにした。

続いて備えの重要性に関し、図6のように、ウサギの家の家具転倒の表現とサルの子の家具止めの表現を対比させることで、備えで危険が回避できることを表現した。

ウサギとサルの地震への備えの対比から防災の大切さを学んだ主人公が、自分の家の備えを確認する場面では、図7のように「さまざまな防災グッズをひとりで準備する様子」を描いていたが、プレ調査では幼児教育者と防災専門家の両者から、防災グッズの内容が高度であり、幼児の防災グッズは防災頭巾で十分であると指摘された。この指摘から、「主人公が親子で地震の備えを考える様子」に改め、再び繰り返して備えの重要性を表現した。さらに、家族会議のイメージを加えて家族とともに備えを確認するよう改善した。

§6 再評価から最終版へ

改訂した防災絵本の成果を確認するため、私立幼稚園2園に、年長児(計132名)への読み聞かせとその教員(計4名)へのヒアリングを行った。年長児は最後まで真剣

